



都市近郊の強み生かす

「畑の近くに消費者」量販店に野菜出荷

入間市の岩田浩さん

【埼玉】入間市の働ぼくらの農園代表取締役の岩田浩さん（42）は写真に、トマト、ネギ、枝豆、ブロッコリーなど15品目を露地で栽培。面積は5・5畝で、家族4人の他、正社員3人、パート10人だ。2019年に株式会社を設立。父は茶の生葉を栽培し、野菜複合経営は代表の浩さんが行っている。

浩さんは07年の就農時から、他産業並みの収入を得られる農業経営を目指してきた。「1千万円の収入を目指し、野菜の出荷を系統出荷から市内外の量販店11店舗に切り替えた。特に、既存店舗

よりも野菜の取り扱いに積極的で、売れ行きが好調な新店舗との取引に力を入れている。畑の近くに消費者がいて、売り先もあるのが都市近郊農業の強み」と話す。

また、人材育成にも力を入れており、新規就農希望の研修生を従業員として雇用。年齢は20代が中心で、独立希望の人を積極的に採用し、これま

で4人の若手農業者を育ててきた。

「独立就農する人には、軌道に乗るまで農園の機械の貸し出しや販路の提供など、できる限り力になりたい。新規就農者が独立して農業経営者に育っていくのを見届けるのがやりがい」と浩さんは話す。

09年からは消費者と直接つながりたいと思い、体験農園を開始。消費者の農業への理解を広げるため、種まきから収穫ま

で農家の技を伝えている。「今後も人との関わりを大切にし、花の摘み取り園や農家レストランで消費者とつながりを強めていきたい。また、新

規就農者が独立できるよう今後とも支援を続けた」と話してくれた。